

---

# 空中列車 - aerial train -

高戸 優

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空中列車 - a e r i a l t r a i n -

### 【Nコード】

N 4 6 8 2 Z

### 【作者名】

高戸 優

### 【あらすじ】

もし死者に逢えるのであれば、貴方は誰に逢いたいと望みますか？

もし生者に逢えるのであれば、貴方は誰に逢いたいと願いますか？

逢いたいと望むのであれば、自然とある駅舎へとやって来てしまいます。

そこで待っているのはキャラが濃い方々。

これはそんな方々の手を借りて逢いたいと想う人へと逢いに行く…  
そんな物語です。

## ラビット・アイ（１）

もし、死者に逢えるのだとしたら。

もし、あの時のことを償えらしたたら。

もし、やり直せるとしたら。

貴方は逢いたい、償いたい、やり直したい、と思いますか？

「……さーて、キミが新しいお客さんかい？」

そう言いながら、少女はボタンと読んでいた本を閉じる。

年は一三ぐらいだろうか。背は小さく、ぶかぶかの駅長の服で身を包んでいた。袖は彼女の小さな手を隠しており、結構だらしない格好となってしまうている。

肩口で切りそろえられた黒髪。深い深い緑色の瞳は少しつりあがつており、年相応な可愛らしい顔立ちを更に可愛く見せていた。

そんな少女は真っ白な指先にてピツ、と目の前に居る少年を指す。

「このボクが聞いているにも関わらず無言とはいい度胸だねえ新客さん？」

それを聞き、少年はただ首を傾げるだけ。

年は一五。茶色の髪に黒い瞳、ガクランで細身というどこにでも居る格好の少年だ。少し異色といえば、男子にも関わらずファンシ―なウサギのマスコットをバックにぶら下げている事ぐらいだ。

少年                    センサキハヤト  
千崎勇人は首を傾げつつ、少女に向かってこう返す。

「……それ以前にここは何処だよ？」

「分かっているくせにとぼけるんじゃないさ。それは他人をムカつかせる所業だ」少女は軽いため息を漏らして「……さてさて、もう一度だけチャンスをやるんじゃないか。さあ、何か言ってみるかいさ」

「……だから、ここは何処だよ？」

「同じ質問しか出てこないとはキミは実に語い力が富んでいないと見た。……ふう、こんなのが次のお客とは先が思いやられるね」

それを聞き、勇人は少しだけむっとする。そして「そっちこそ何なんだよ！！ 名乗りもしねえのか！？」

「おつとつと、名乗っていなかったっけ？ ……まあ、名乗っていなかったならば今名乗るまでさ。ボクの名前は桃天トウテン 夜美ヨミ。果実の『桃』に天照の『天』、美しい夜さ。実に面白い字体だろう？ さあ、ボクは名乗った。だから次はキミの番さ」

「……………」彼は腑に落ちないという表情をしながらそっぽを向き  
「……千崎勇人」と不満げに漏らす。

「ふむ……センサキハヤト、ねえ……」

そういうと、少女は目の前にある木製の古びた机の上にあった書類を手に取りパラパラと眺め始めた。

「さ、し、す、せ……センサキ、センサキ……おや、どうやらリストには載っていないみたいだ」

「……それって何だ？」

「ん、コレかい？ コレは死者に逢いたいという想いを持っている者たちのリストさ。大抵このリストに載っている者がここに来るんだけど……どうやら、キミは死者に望まれたクチらしい」

そう言いながら夜美はひらひらとリストを振る。その光景を見て少年は眉をひそめて「……それ以前に、ここは何処なんだよ？」

「おや、ここまで言ってまだ分からないとはキミは馬鹿だけでなく阿呆でもあるらしい」

少女はそう呟くとトン、と軽い音と共に椅子から地面へと降り立った。タンタン、と革靴を鳴らして外へと赴く。その後に、少し躊躇っていた勇人も続く。

そして外へ出た瞬間      ぶわつと暖かな風が彼の体を包み込む。

（何だ？）顔を上げると、桜の花びらが彼の髪に乗っかる。

摘まんで花びらを軽く眺めた。それを見てふつと淡く儂く笑う。

花びらを手中に入れながら彼は夜美の元へと歩いていった。彼女は桜が舞う所で呆れたため息を漏らす。

「早く来ないかい。女子を待たせるとはキミは男として最低最悪だ」

「そっちが何の説明も無く行っちゃったからだろうが!!」

「全く、折角このボクが直々にキミにここが何処か教えようとしていたのに……この恩知らず……」

「おい、今小声で何言いやがった?」

「まあ恩知らず!! はおいておいて、だ」

「お前大声で何言ってやがんだよ本当に!!」

「そんな小さな事は気にせず、見てみたまえ」ピツと先ほどまでの建物を指して「ここが、その正体さ」

そう言われ、彼はゆっくりと振り返る。建物は古い駅のような形をしていた。

木造建築で駅名が書かれる筈のプレートは真っ白なままだ。古びた感じを纏っており、何時でも壊れてしまいそうなレトロな雰囲気を持っている。

勇人はもう一度じっと眺めてから「……………いや、やっぱり分かんねーんだけど…………」

「何だつて？ キミはやっぱ馬鹿で阿呆で無知童貞野郎なのかい？」

「お前はアレか、俺を怒らせてえのか？ 誰が馬鹿で阿呆で無知だつて！？」

「童貞は否定しないのかい？」

「……………」

「ふむ、ボクは血も涙も無い訳じゃないからね。深追いはしないでおこう。まあ、ここの説明だが……簡単に教えるのは実につまらない。そうだ、ヒントを出すから答えてくれ」

少女は腕を上げる。ダボついた駅長の服から真つ白な細い指を五本伸ばした。そしてグーを作り上げてから人差し指だけを伸ばす。

「ここはただの駅じゃあない」

「そりゃそうだろ。さつきからレールはあるっぽいのに電車全く走ってねーし。つかお前が駅長つて時点で可笑しいから……………」

「五点」

「手ひどい答え来た！？」

「一〇〇点満点だから頑張リたまえ。頼むからボクを失望させないでおくれよ？ さて、次のヒントだ」中指も伸ばし「駅と駅を繋ぐ場所じゃなく、ある世界と繋ぐ場所だ」



「……ある世界って何だよ？ 死者の世界とか？」

「ふむ。二三点。若干惜しい所へ来ているが……」

「……死者の世界が惜しい？」 勇人は何時の間にかマジメに考え始め「……まさか……天国とか、地獄とか？」

「五〇点」

「え、じゃあここは俺が生きてる世界と天国とか地獄とかを」

「ふむふむ、まあ九〇点くら」

「繋げて俺の生きてる世界で死んじまった奴の魂を天国と地獄へ葬送する場所なのか！？」

「マイナス一〇〇点」

「マイナスってあり！？」

「行き過ぎだ。途中までいい線を行っていたにも関わらず、キミは実に悲しい少年だよ」ふう……、と夜美は重いため息を漏らす。

このやり取りを続けても終わりが見えないと思ったのか彼女は手を下ろし「答えを教えるさ」と呆れた声で呟いた。

「ここは二度と出会えないはずだった、生者と死者を繋げる駅。生者が死者に逢いたいと望めば。死者が生者に逢いたいと望めば。ボク達がその願いを叶える場所さ」

さて、と呟くと少女は妖艶に笑う。年不相応な、怪しく美しい微笑を湛えて彼を射抜いて、小さくそれでもはつきりと囁いた。

「キミに逢いたい、と願っている人にキミは逢いたいと思うかい？」

## ラビット・アイ (1) (後書き)

初めまして、高戸 優と申します。

駄文すいません…グダグダ展開すいません…。

少しずつでも更新していこうと想うので、どうか温かく見守ってください。

次回は話も進むと想うので…。

では、また逢えましたら

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4682z/>

---

空中列車 - aerial train -

2011年12月15日22時50分発行